

園での経験と 幼児の成長に関する調査

ベネッセ教育総合研究所では、幼稚園や保育所、認定こども園などに通う年長児をもつ保護者、約2,000名を対象に、園での子どもの経験や園の環境、園生活を通じた成長などをたずねるアンケート調査を行いました。園での経験が子どもの育ちにどのように関連しているかを把握することが、これからの保育のあり方を考える際のひとつの材料になれば幸いです。

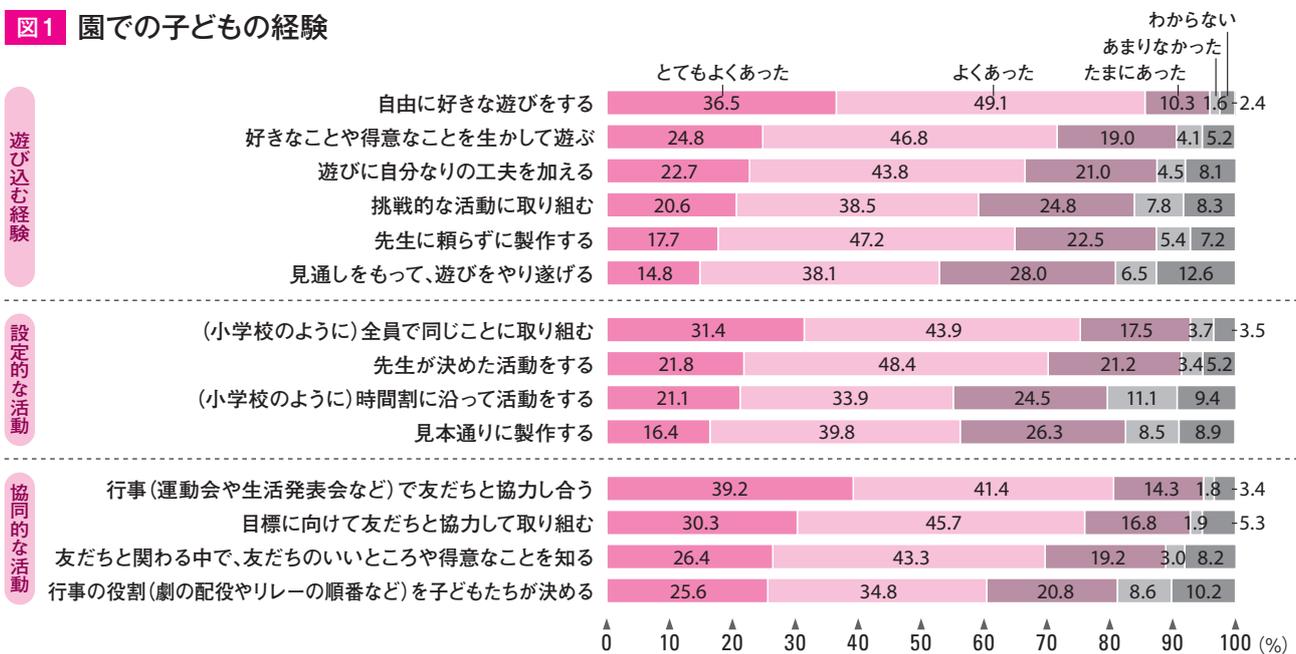
引用・転載時のお願い 本調査の結果を引用・転載される際には、調査名称を記載してください（例：ベネッセ教育総合研究所「園での経験と幼児の成長に関する調査」（2016））。

多くの子どもは、「遊び込む経験」「協同的な活動」など、多様な経験を積んでいる

Q 園でのお子さまの経験として、以下のことはどれくらいありましたか。

※5歳児クラスの1年間についてお答えください。

図1 園での子どもの経験



研究員解説

年長児期の園での経験として、3カテゴリー14項目をたずねました。全項目で「よくあった」（「とてもよくあった」+「よくあった」。以下同）が半数以上であり、多くの子どもがさまざまな活動を体験していることがうかがえました。一方で、同じ「遊び込む経験」の中でも、「よくあった」比率について、「自由に好きな遊びをする」は最も高く

85.6%で、つづいて「好きなことや得意なことを生かして遊ぶ」は71.6%、「遊びに自分なりの工夫を加える」は66.5%、「先生に頼らずに製作する」は64.9%と、差がありました。特に「挑戦的な活動に取り組む」は59.1%、「見通しをもって、遊びをやり遂げる」は52.9%と5割台であり、他と比べると低い傾向がみられました。



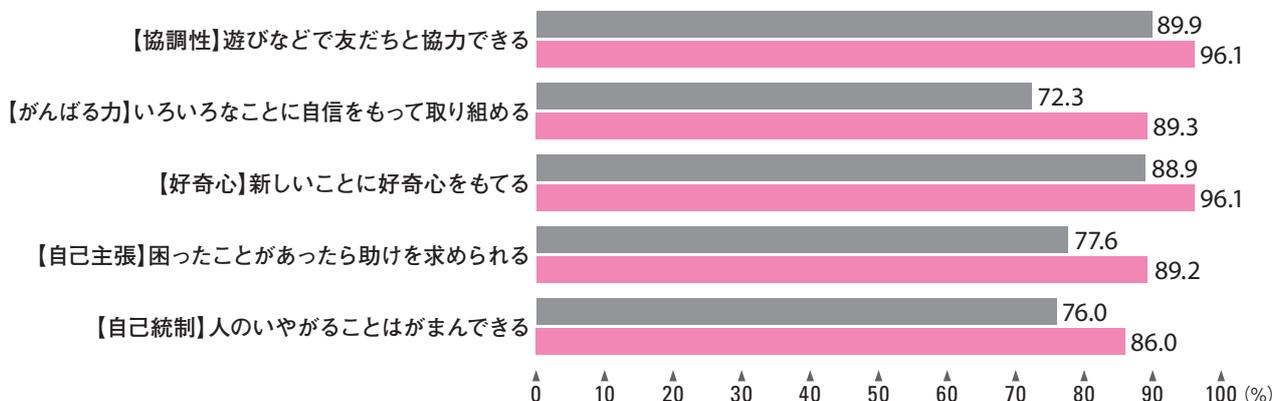
真田美恵子◎ベネッセ教育総合研究所主任研究員。幼児教育・保育や子育てなど、就学前の子どもをもつ家庭や園を対象とする調査研究に携わる。

園で「遊び込む経験」を多くする方が、 子どもの「学びに向かう力」は高い

分析 園での経験と子どもの「学びに向かう力」

図2 子どもの「学びに向かう力」（遊び込む経験別）

遊び込む経験 ■ 少群(889) ■ 多群(1012)



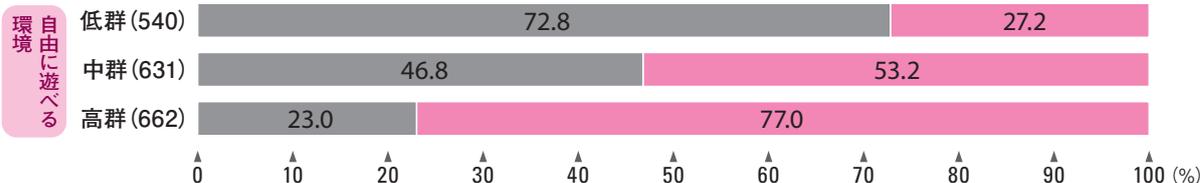
※「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の%。

※「遊び込む経験」は、6項目(図1より)について、「とてもよくあった」を4点、「よくあった」を3点、「たまにあった」を2点、「あまりなかった」を1点として合計値を得点化し、2区分した。1項目でも「わからない」を選択した人は除く。

※上記以外の「学びに向かう力」に関する項目についても同様の傾向であった。 ※()内はサンプル数(以下同)。

図3 遊び込む経験（自由に遊べる環境別）

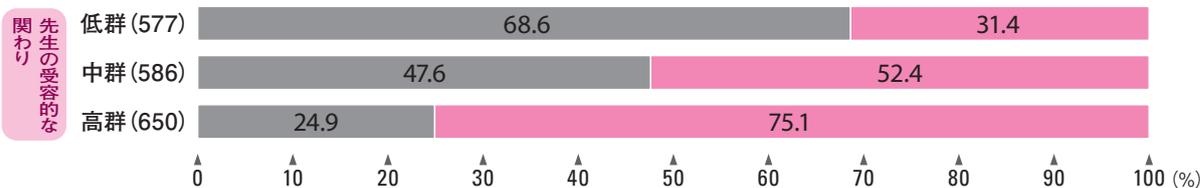
遊び込む経験 ■ 少群 ■ 多群



※「自由に遊べる環境」は、5項目(「自由に遊べる時間が十分にある」「自由に遊べる場所が十分にある」「自由に遊べる遊具や素材が十分にある」「季節に応じた教材や絵本が使われている」「さまざまな表現活動(お絵かき、製作、音楽など)をする」)(図示省略)について、「とてもあてはまる」を4点、「ややあてはまる」を3点、「少しあてはまる」を2点、「あてはまらない」を1点として合計値を得点化し、3区分した。1項目でも「わからない」を選択した人は除く。

図4 遊び込む経験（先生の受容的な関わり別）

遊び込む経験 ■ 少群 ■ 多群



※「先生の受容的な関わり」は、5項目(「先生の言葉かけが温かい」「先生は子どもの「やりたい」気持ちを尊重している」「先生がのびのびと保育をしている」「先生は保護者の気持ちに寄り添っている」「先生同士の連携がとれている」)(図示省略)について、「とてもあてはまる」を4点、「ややあてはまる」を3点、「少しあてはまる」を2点、「あてはまらない」を1点として合計値を得点化し、3区分した。1項目でも「わからない」を選択した人は除く。

研究員解説

「遊び込む経験」(図1より)の頻度に応じて2群に分けて、子どもの「学びに向かう力」との関連を調べました。「学びに向かう力」とは、非認知的スキル、社会情動的スキルとも言われ、ベネッセ教育総合研究所では「協調性」「がんばる力」「好奇心」「自己主張」「自己統制」から構成する概念として研究に使用しています)。その結果、年長児1年間に、園で「遊び込む経験」を多くしている子どもの方がそうでない子どもに比べて、例えば「いろいろなことに自信をもって取

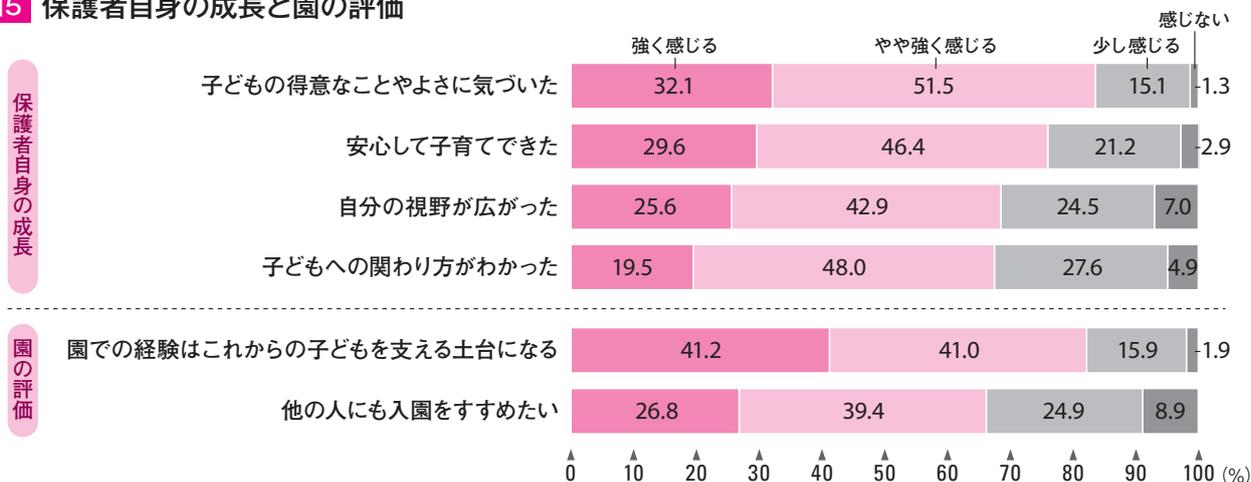
り組める」比率は17.0ポイント高いなど、「学びに向かう力」が全体的に高い傾向がみられました(図2)。

また自由に遊べる環境が十分にあるほど(図3)、先生の受容的な関わりがあるほど(図4)、「子どもの遊び込む経験」が多いこともわかりました。遊び込む経験は、自由度の高い遊びの環境や先生の応答的で温かい関わりにより支えられていることがうかがえます。

保護者の83.6%は、園生活を通して「子どもの得意やよさに気づいた」と実感

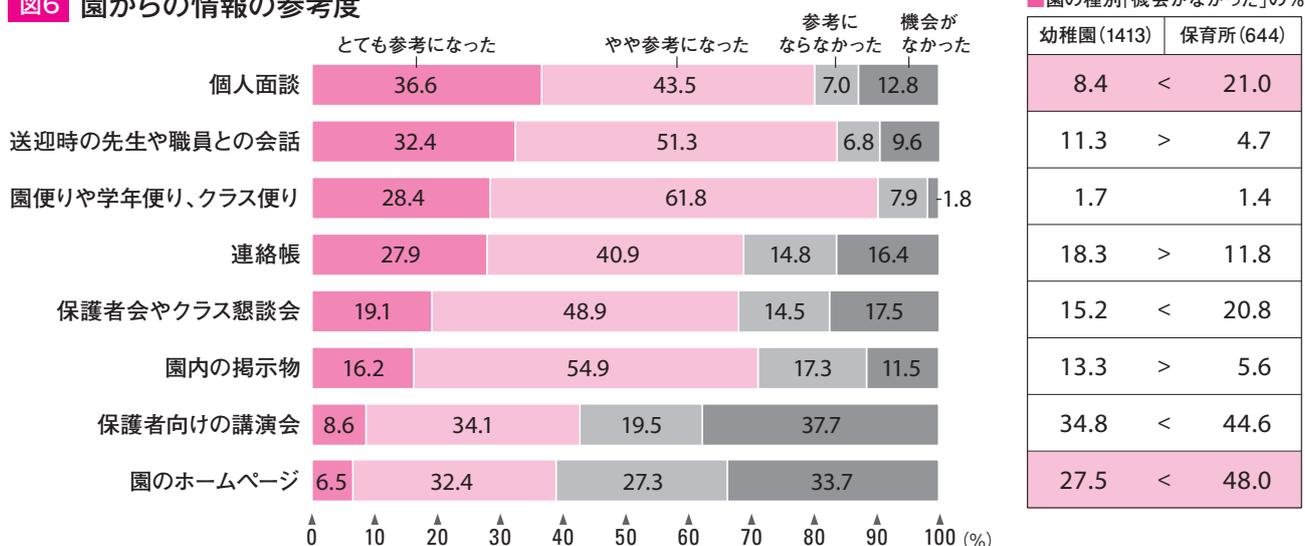
Q 園生活を通して、以下のことをどれくらい感じますか。

図5 保護者自身の成長と園の評価



Q 園からの情報は、子育てをするうえでどれくらい参考になりましたか。

図6 園からの情報の参考度



※ 右表について、園の種別は、「公立／国立幼稚園」「私立幼稚園」を「幼稚園」に、「公立保育園」「私立保育園（認可／公設民営を含む）」「認可外保育園」を「保育所」にした。※ 幼稚園と保育所で5ポイント以上差のあった項目を「>」「<」として示し、10ポイント以上差のあった項目には網掛けをしている。

研究員解説

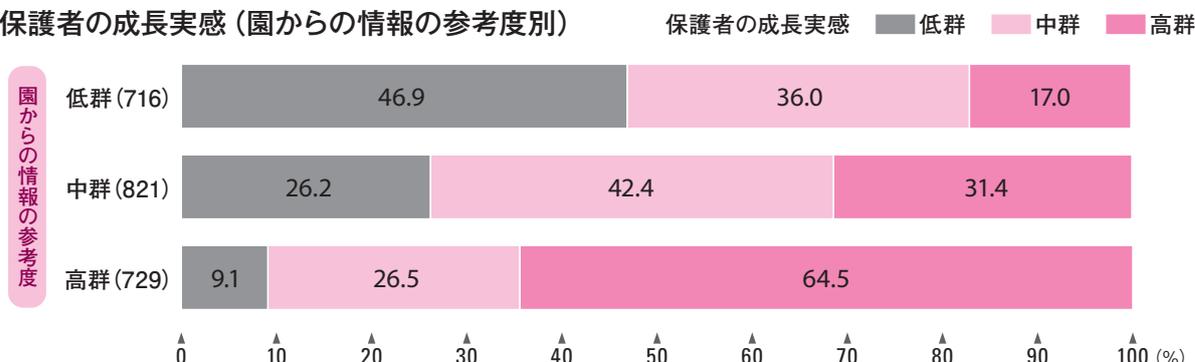
次に、園生活を通じた保護者自身の成長実感についてたずねたところ、「子どもの得意なことやよさに気づいた」（「強く感じる」＋「やや強く感じる」。以下同）は83.6%、「自分の視野が広がった」は68.5%、「子どもへの関わり方がわかった」は67.5%であり、約7～8割の保護者は、園生活を通して自分自身の成長も感じていることがわかりました（図5）。また園から提供される情報が、どの程度子育ての参考になったかをたずねました。「とても参考になった」比率が高かった

のは「個人面談」36.6%、「送迎時の先生や職員との会話」32.4%でした（図6）。園の種別にみると、幼稚園では「送迎時の先生や職員との会話」の「機会がなかった」比率が保育所よりも高く、保育所では「個人面談」の「機会がなかった」比率が高いなどの傾向がみられました（右表）。保護者が比較的集まりやすい幼稚園と、共働き世帯が多く送迎時のコミュニケーションが重要な機会となる保育所、それぞれの特性による結果であると考えられます。

園生活を通じた保護者の成長実感には、「園からの情報参考度」「園と関わる機会」などが関連

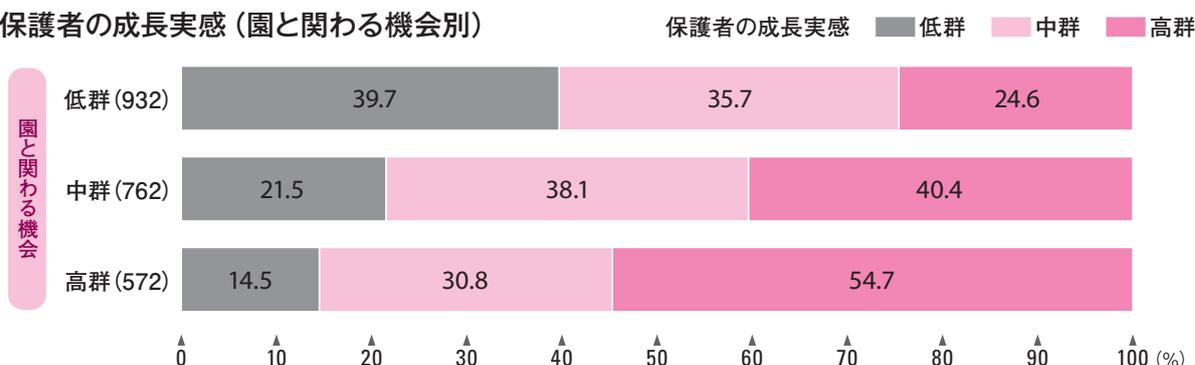
分析 保護者自身の成長と園と関わる機会

図7 保護者の成長実感（園からの情報の参考度別）



※「保護者の成長実感」は、図5の4項目について、「強く感じる」を4点、「やや強く感じる」を3点、「少し感じる」を2点、「感じない」を1点として合計を得点化し、3区分した。※「園からの情報の参考度」は、図6について「とても参考になった」を3点、「やや参考になった」を2点、「参考にならなかった」、「機会がなかった」を1点として合計を得点化し、3区分した。

図8 保護者の成長実感（園と関わる機会別）



※「保護者の成長実感」は、図5の4項目について、「強く感じる」を4点、「やや強く感じる」を3点、「少し感じる」を2点、「感じない」を1点として合計を得点化し、3区分した。※「園と関わる機会」は、5項目（「先生と話をする」「園の行事に参加する」「保育を参観する」「保育や園の運営を手伝う」「保護者同士の交流の会に参加する」）（図示省略）について、「週に4～5日」を6点、「週に1～3日」を5点、「月に1～3日」を4点、「年に4～10日」を3点、「年に1～3日」を2点、「なかった」を1点として合計値を得点化し、3区分した。

研究員解説

図5で示した保護者自身の成長と関連する要素を調べたところ、園からの情報が子育ての参考になったと答えるほど（「低群」<「中群」<「高群」）、成長実感が高くなることがわかりました（図7）。同様に、先生と話をしたり、園の行事に参加したりするなど、園と関わる機会も保護者の成長実感に関連していました（図8）。また、園からの情報提供や園と関わりがあることで、保護者は子どもの意欲を尊重するような養育態度をとる傾向が見られ、そうした養育態度が「学びに向か

う力」を支えていることも示唆されました（図示省略）。

本調査からは、園が子どもの育ちに対して、二重の役割を果たしていることが明らかになりました。つまり、「遊び込む経験」を充実させることで子どもの育ちを直接支える面と、保護者に対する情報提供や園と関わる機会の提供を通じて、保護者の成長を促すことで、間接的に子どもの育ちを支える面です。各園はそれぞれの特色を生かして、「遊び込む経験」を十分に保障しながら、保護者とともに子どもの育ちを支えることが期待されます。

出典：園での経験と幼児の成長に関する調査

調査対象：幼稚園・保育園・認定こども園などに通う年長児をもつ保護者 2,266人（母親 2,060人、父親 206人）

※年齢は25～49歳

調査時期：2016年2月19日～2月22日

調査地域：全国

詳しい調査結果はこちらからご覧になれます。ぜひご活用ください。

▶ <http://berd.benesse.jp/>

調査方法：インターネット調査

調査項目：園での子どもの経験、園の環境、園と関わる機会、園から提供される情報の参考度、園生活を通じた成長実感、子どもの「学びに向かう力」「文字・数・思考」、園の満足度など

園と保護者が手を取り合い 子どもの「学びに向かう力」を支える



今回の調査から、園で“遊び込む経験”が多い方が、「学びに向かう力」が高いことが明らかになりました。この結果から、園ではどのような子育て支援が求められるのでしょうか。今回の調査の監修者のひとりである共立女子大学家政学部児童学科教授の白川佳子先生にうかがいました。

共立女子大学 家政学部児童学科教授

白川佳子

しらかわ・よしこ

専門分野は臨床発達心理学、教育心理学。「幼小連携」などが現在の研究テーマ。主な共著書に『知能と人間の進歩』（新曜社）、『保育の心理学Ⅰ』（中央法規）など。

保育者の受容的な関わりが 子どもの遊びを広げる

これまで多くの園で経験的に大切にされていた「遊びの中での学びに向かう力の育成」が、データとして実証されたのは、大きな収穫です（図2）。特に今回の調査対象である年長児は、急速に遊びが発展する年齢です。子どもの姿から育ちを読み取り、保育者が適切な援助をすることで、遊びの質は深まります。

例えばある園では、ひとりの子どもが家庭からハーブを持ってきました。保育者は遊びへと発展するようにとハーブの本を用意したところ、「ハーブ石けんを作りたい」という声が子どもからあがりました。その声を保育者がひろいあげ、「どうやったら作れるかな」と質問を投げかけると、自宅で保護者と石けんの作り方を調べてきた子どもがいたので。その後も、保育者と子どもが対話をしながら、実際にハーブ石けんを完成させたということです。子どもの意欲を尊重する保育者の受容的な関わりがあってこそ、子どもたちは遊びを発展させられるのです。

子どものよさに気づけるような、 保護者支援を行う

また今回の調査では、保護者の成長実感が、間接的に子どもの育ちを支えることも明らかになりました。

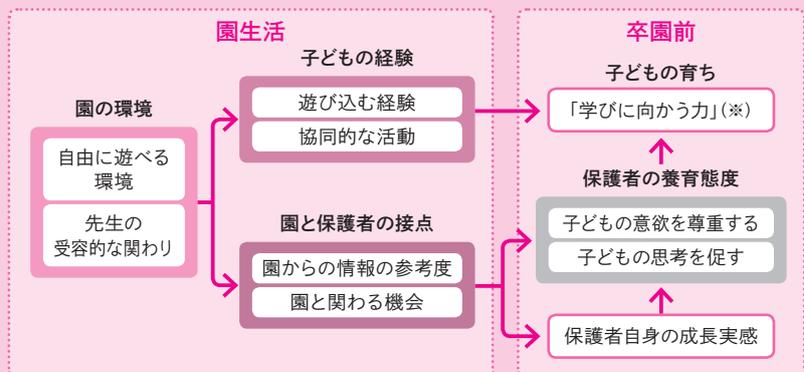
わが子のよさに気づけるといった保護者の成長を促すには、園からの情報提供が欠かせません。保護者は、子どもへの期待ゆえに、欠点に目を向けてしまう傾向がありますが、気になる部分は、その子のよさでもあるはず。例えば、「友だちと上

手に遊べない」と保護者が悩んでいるなら、保育者は「じっくりひとつのことに取り組める」と長所として評価できます。毎日子どもを見守る保育者からのひと言は、どんな育児本より保護者の心に響きやすく、子どもの意欲を尊重した子育てをするきっかけになるでしょう。

子どもの得意なことやよさを伝えるのは、面談や送迎時の会話などの機会だけでなく、具体的な活動を書き込んだ写真入りのドキュメンテーション（掲示物など）を用意するのも良いですね。保護者に保育に参加してもらい、わが子のよさを実感してもらおうのもひとつの方法です。

子どもは園だけでも、家庭だけでも育ちません。保育者と保護者が手を取り合いながら、子どもの育ちを支援していけると良いと思います。

◎本調査で明らかになった主な関連



※「学びに向かう力」について
本調査では、子どもの育ちとして「好奇心」「協調性」「自己統制」「自己主張」「がんばる力」を「学びに向かう力」と設定して、園生活との関連を調べた。「学びに向かう力」は生涯にわたり、社会生活を営むうえで基盤となる力である。また、「幼児期から小学1年生の家庭教育調査」（ベネッセ教育総合研究所）において、小学校入学以降の学習や生活につながる幼児期の学びとして設定した3つの軸（「学びに向かう力」「文字・数・思考」「生活習慣」）のひとつである。